
Air force

篠宮 夏希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Air force

【NZコード】

N8612Y

【作者名】

篠宮 夏希

【あらすじ】

物語の舞台は、今より少し先の未来。

未来では、未成年による失踪事件が多発していた。

そして、主人公は変な人物と出会い、気絶させられてしまつ。

次に目が覚めたのは、訳もわからない森の中…?

全く新しい（？）かは分かりませんが、SF系ファンタジー始動！

第一話・シルクハット

2089年。

気が付けば、日本は科学先進国となっていた。

今俺が歩いている街中も、ゴミ拾いロボットや警官ロボット、さらには店専用の宣伝ロボットなどもいたりする。

形なんかは様々だが、その役目に最も効果的なものが採用されるのが普通だ。

例えば警官ロボ。

こいつはボディが小さく作られており、動きが素早い。内臓機能で、指名手配犯を全員インプットしてたり、手錠にスタンガン、ゴム弾なんてのも装備されているらしい。

物騒な世の中になったもんだ。

と言つても、俺は現代人なので昔のことは知らないが。

俺は、立ち止まり、喉を突き出しながら空を見上げる。

周りには超高層ビルが数建。

その上を、新型旅客機が通過している。

さすがに、どこかのSF映画に出でてくる、空飛ぶ車の実現には『まだ』いたつてないのこと・・・。

しかし、科学が進化する一方で、犯罪の方も凶悪で犯しやすくなっているのも事実。

万引き防止などをチェックするための機械。
あれが店内の出口には必ず取り付けられているため、店の方も安心
できた。

だが、それもついこの前までの話だ。

科学が進化したおかげで、その機械の機能をジャミングするモノが
最近出回っている。

そのため、多くの店舗が防犯カメラの設置数を増やしているらしい。
所詮、人間とロボットだ。
どれだけ頑張つても、犯罪者が居なくなるといつことはない。

いくら科学が進化しても、たつたそれだけの話。

いつの時代もこの構造は絶対崩れないのだろう。

それだけは、変わらない気がする。

「またか・・・」

俺はテレビ放送局のビルに取り付けられている、巨大ＴＶを見ながら一人呟いた。

ニュースで報道されているのは、最近頻繁になってきている『未成年連續失踪事件』について。

この連續失踪事件は、今年の春頃から起き始めていることが最近明らかになった。

ということは、もうかれこれ3ヶ月は経つてことになる。

それだけ時間が経過していながら、姿をくらました人々は『誰一人』として、発見されていない。

「えー、今日一日だけで、分かつてている失踪者は20人以上と警察署からの報告です。

未だに原因は不明とのことですので、みなさまも十分ご注意ください。それでは、」

ニュースキャスターが一礼して、ニュースは終了。

それと同時に、時刻は21時を迎えていた。

「ふう、そろそろ帰らないと俺も危ないな」

俺はTV画面から田を離し、再び足を進める。

危ないというのは、先程のニュースでやっていた原因不明の、不気味な失踪事件のこともあるし、何より俺は未成年者だ。

この時間に歩いて、警官やロボに捕まると色々と面倒なことになる。

なので、そろそろ退散することにした。

・・・・のだが、

『ピーピー、現在時刻21時4分。未成年者と思われる人物発見。身分を証明してください。』

背後から、機械音声が流れるのが聞こえた気がした。

周りの視線が、俺に集まっているのはきっと気のせいだろう。

そう・・・

「信じたい！」

俺は全力ダッシュ。

ロボの方は、なんともスピーディな動きで俺を追いかけてくる。不意打ちをかけて、少しだけ出遅れてはくれたが、このままだと捕まるのも時間の問題だ。

（何か・・・何かないのか！）

走りながら、俺はこの危機的状況を回避するべく当たりを見回す。

（・・・・！）

そこで目に入ったもの。

「これなら……どうだ！」

俺は急カーブをして、細い路地裏へと走り込む。

普通この様な路地裏には、ヤンキーやナンパ、薬物の売人達のテリトリーだつたりするものだ。

もちろん、それを取りしまわないロボではない。

しかも、細い路地は妙に入り組んでいて、遠隔操作の警官ロボの効果が薄れる。

『ビー！ ビー！ こちら、a - 149。路地裏にて怪しい人物を多数確認。確保します。』

「ザザ・・・、了解。こちらも、今向かっている」

人間の警官からの指示を受け、ロボは強力ネットを発射。

細い路地に、巨大なクモの巣ができた。

「ツ・・・！？ やべつー！」

巨大なクモの巣は、走っている俺の身にも降りかかるてくる。

俺は、さうにスピードを出して、左へと曲がり、どうにか回避。

『ペー！ ペー！ そこの顎、止まりなさい』

後ろからロボの声が聞こえてくるが、止まる気はない。

そのまま右へ、左へ、さらに左へ・・・・。

俺は、狭い路地を5分間も走り抜け、ようやくロボを巻いた。

「ハアツ・・・・・ハアツ・・・」

久々の全力ダッシュを5分間持続し続けた俺の額からは、汗が垂れる。

少し歩くと、広めの道路に出た。

建物の壁に寄りかかりながら汗を拭う。

「ハハツ、これは師匠に感謝しなきやな」

息切れしながらも、恩師に感謝を述べる。

別に師匠は口ボから逃げるために、俺を鍛えてくれたわけではない
が・・・。
まあ、よしとしておいつ。

「つふつ・・・・・」

大きく息を吐いて、家へと帰ろうとする。

「つて、じにはどうだ?」

俺が出た道路は住宅街で、家の所々に明かりが灯り、笑い声が聞こ
えてきた。

(・・・楽しそうだな)

正直言つて、ちょっと羨ましかった。

俺の家族は、俺に、双子の妹弟、母さんの4人家族。
本当は5人だったのだが、父さんは俺が中学に上がる頃・・・つま

り1年と少し前に他界してしまった。

研究者という職業柄、なかなか遊んでもらうことはできなかつたが、面白くて、優しい父さんだつたと思う。

死因は、母さんからは詳しく教えてもらえないし、そこまで知りたいとも思わない。

なんて、むかしのことを思い出しながら、携帯の画面を眺める。

現在の位置情報を確認しながら歩く。

『ドシンツー』

携帯の画面に意識がいつていたため、周りを見ていなかつた俺は人とぶつかつて倒れた。

「イテ・・・。つと、すいません。大丈夫でしたか？」

俺は、ぶつかった人物の方に目をやり、硬直した。

その人物は、なんとも奇妙な格好をしていたため、驚いたのだ。

頭にはシルクハット、タキシードに杖。鼻より上は仮面で隠れていて見えないが・・・。

こんな蒸し暑い日に、なんて格好をしているのだろう。

今日の最高気温は、31度。

いくら夜とは言つても、25度くらいはあるだろ。

そんな時、人物は俺に手を差し出していた。
珍妙な格好に見とれ、気がつかなかつたが・・・。

「あ、ありがと」や・・・ツー?」

俺が手を握ろうとしたとき、急に人物からとつもない悪寒を感じた。

(何か嫌な予感がしないでもないような・・・)

そつ、まるで早く握れと言わんばかりのようだ。

不気味に感じた俺は自分の足で起き上がる。

人物は手を差し伸べたまま首をかしげている。

それに対し、俺は「以後、気を付けます」と礼儀正しく述べ、立ち去る。

『これは面白い。』

唐突に声が届いてきた。

今まで何もしゃべらなかつた人物が、よつやく口を開いたのだ。

ゆっくり振り返つてみると、男は杖をぐるぐると振り回し、なにやら意味有りげな笑みを浮かべている。

『これを見破られたのは、あなたが初めてですよ。』

そう言つた男は、差し伸べてきた手と反対の服の袖からスタンガンを出して來た。

バチバチと、唸りを上げながら青っぽく光る。

「そりゃい。それで、俺なんかに何の用？」

生憎、俺は友達というものが少ない。

この、どこか抜けている性格のせいだろうか？

いや、自覚はしてるからそこまで酷くないと思つ。

どっちにしろこんな変人は近寄りたくない、というのが正直な感想だ。

『いや、あなたにちょっとした実験に付き合つていただこうかと。』

「実験？」

意外なことを言われたものだから、俺は思わず聞き返した。

『ええ。他にも人員を投入しているんですが、なかなか合格者がでなくて困っているんですよ。』

合格者?

「なんの」とだ?」

フフフと、男は笑った。

『それは、あちいらに着いてからにしましょう』

『こいつはせりきから何を言つてるんだ?』

訳も分からず、俺は男を見つめた。

『おやおや、そんな田で見つめないでください。照れてしまいますつー。』

「ツ・・!?

男は勢いよく一歩りへ、突っ込んできた。

右手に杖、左手にはスタンガンと、非常に危険だ。

まずはじめに、杖を向けてくる。

それを躊躇したかと思つたら、スタンガン。

いくら俺でも、これを長時間耐え続けるのは厳しい。

「チツ！」

舌打ちして、俺は男の持つっていたスタンガンを蹴り飛ばす。

しかし、男は気にせず杖で攻撃してくる。

「クソツ・・・」

一度間合いを取る。

『先ほどにプラスして、これほどとは・・・。今回はいい収穫ができましたかね。』

今回はつていいとは、何回もやつてるのか？

考えれば、考えるほど疑問が浮かび上がる。

「ハツ、悪いがあんたに収穫される気はないぜ？」

ちよつとかつこつけて言つてみる。

『それは困りましたね・・・仕方がない、あれを使いますか。まあ、まだ試作段階ですけど、あなたなら大丈夫でしょう』

男の周りから、バチバチと何か音がした。

それは、青く光散らし、男の右手に集まっていく。先程のスタンガンという訳ではない。

「おいおい・・・なんだよそれ

俺は自分の目の前で起つていて、信じられなくて声を漏らした。

男のそれは、超能力や魔法などとしか言い表しようがなかつたのだ。

『これは、まだ試したことがないんで、加減がいまいちわかりませんが・・・。』

ちょっととぐらいい痛い思いをしても、悪く思わないでくださいね?』

そう確認を取つた男は、俺に光るものを見ながら飛ばしてくる。

躲すとか、そんなレベルじゃなかつた。

ただ目の前に、巨大な光が現れて、俺は飲み込まれていつた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア・・・」

住宅街に、強烈な光と叫び声が響いた。

第一話・森の中（前書き）

おはようございます、 じんにあわ、 じんばんわ。
作者の夏希です。

エア フォース第一話でござります。
よろしくお願ひします。

第一話・森の中

紅葉、知つてゐるか？

なにをだよ。

（これは・・・俺の記憶？）

とあるアメリカの作家がいつたんだ。

男は強くなければ生きていけない、
優しくなれば生きる資格がないと。

いや、いきなり言われても意味わからんないから・・・。

つまり、俺がお前に言いたいのは、強くなれ！ そして優しく…。
そのまんまで分かりやすいだろ？

確かにそうだけど…。なんで今それを言つんだよ。

(「の声…・親父なのか？」)

誰よりも大きく育て。
もし俺が命にこれなくなつても、誰かを守れるだけの力を身につけるんだ。

・・・・まあ、分かったよ。

よし！ じゃあ、お前にこれを渡そ！

これが、俺が見た最後の親父の姿。
その日もいつもと同じように、「じゃあな！」。

そう言って家を出でいった。

「・・・・・」

（このまに俺は眠っていたんだ？）
田をじすじながら、周りを見て回す。

「んこふ・・・・・」

もう一度、田をこすって、頬を引っ張ってみる。

うん、痛い。

これは夢じゃない。

「どうだよ……！」

俺が田を覚ました場所は、森の中。

俺の頭が正常だったのなら、こんな場所で寝るはずがない。

なら・・・・・

「なんで？」

キヨトンと、しながら首をひねる。

（えっと、俺は寝る前に……）

額に手を当て、それっぽいポーズをとる。

「さうだよー、あの仮面にやられたんだー！」

記憶を絞り出して、俺はようやく思い出した。

警官口ボから逃げて、帰ろうとしたときにあいつに襲われた。

でも、最後に見たあれはなんだったんだ？

そりひ首をひねる。

しかも、目が覚めたら変な場所にいるし・・・。

どうなつしる？

「だああああああ、ちくしょう！」

どでんと横になる。

(訳が分からん)

森に吹く風が少し心地いい。

木の香り、鳥の声、ぽかぽかした太陽。

何か、今までの自分が馬鹿みたいに思えてきた。

『バキバキ！』

ほら、バキバキって爽快な音もする。

おまけに、地面は揺り籠のように揺れる。

なんだか眠たくなつてきた。

「ふああ・・・・・」

『バキバキ！ ズシーン！』

なんだか響きのいい音が途絶えたと思つたら、俺を照らしていた太陽が隠れた。

「ん・・？」

急に寒くなってきたものだから、思わず片目を開ける。

それは、太陽と重なつていてるためよく見えなかつた。

だが、俺の顔の横にダラダラと、なんだか汚い液がたれてきたことでちょっとした危機感を覚える。

上半身を軽く起こしながら、それをしっかりと確認しようとある。

見た目は3メートルくらいで、その表面はウロコに覆われていた。口からは牙が何本も見え隠れしていて、眼には俺の姿が移りながらも輝いていた。

「おじおじ・・・・・冗談はおやめなさいよ・・・

「ゴクリと喉を鳴らす。

俺は、またもダッシュする。

後ろからは、小さなロボット。

・・・なら、まだ良かつた。

あればどう見ても恐竜か、ゲームとかに出てくるモンスターだ。

「シンシン」と言しながら、恐竜は追いかけてくる。

距離は5メートルといったところだらうか。

恐竜は、その大きさからは想像できないスピードと俊敏さだ。

後ろを振り返る。

「ゞゞわああああああああー！」

半分涙田になりながら、逃げる」とー三分。

恐竜を巻いて、森から脱出。

『グアアアアアア・・・』

遠くからまだ声がしてくる。

「ここも来るかもしぬないので、慌てて移動する。

「とこか、今は走ってばかりだな・・・・」

いや、でも今日って表現の仕方は正しくないのか？

眠る前は夜だったけど、こじりやもう朝だし・・・・。

「おー。」

考え事していると、少し遠くに街らしきものを発見。

でもその街は、日本とは全然違つ作りのようにも見えた。

「 とりあえず行つてみるか」

そう言って、街へと向かつた。

一人の少年が、街へと向かつて歩いている頃。

森の中では、全長3メートルはあるであつて恐竜が暴れていた。

少女は、強大な力を感知してここまでやつて来たのだが……。

「ここいつのせいなの？」

一人つぶやき、途中拾ってきた石を恐竜へと思いつきり投げつける。

『ギュアアアー。』

少女の存在によつやく気がついたのか、ギロリと目をむき出していく。

「そんなわけないか……」

かなり残念そうな少女は目を瞑り、ため息混じりに唱えた。

「 破壊の雷よ、滅せ。」

少女が目を開けるのと同時に、轟音と衝撃が森中に響いた。

恐竜がさつきまでいた場所には、大きなクレーターのようなものができていた。

少女は、ここに来る途中に突如感じた大きな力。
その正体を探りながら声を漏らす。

「あれほどの力・・・一体あなたは誰なの？」

第一話・森の中（後書き）

こんな作品を読んでくださってありがとうございます！

次からは、最悪でも一日に一話程度のスピードで更新していきます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8612y/>

Air force

2011年11月26日19時48分発行